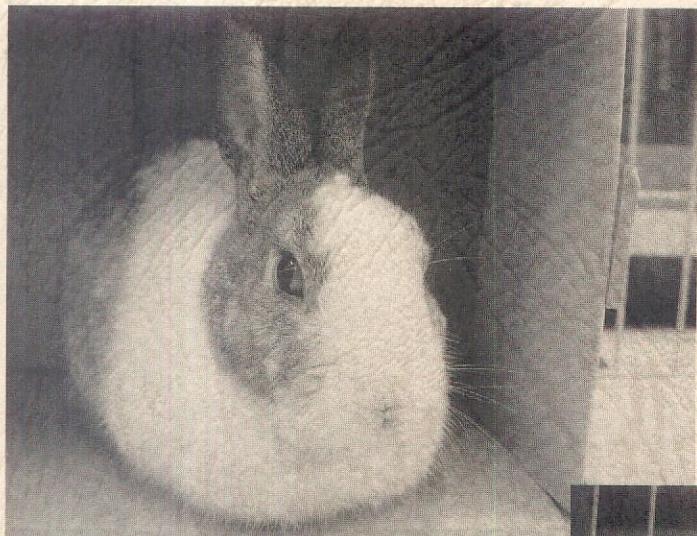


研究紀要 第73号

石川の自然 第29集 生物編(14)

学校にくらす動物たち

—学校飼育動物の教育的意義—



平成17年3月
石川県教育センター

表紙写真 センター飼育のウサギ (2004.12)

「石川の自然」第29集 生物編(14)発刊にあたって

平成16年度「石川の自然」第29集 生物編(14)の研究をまとめ、当教育センター研究紀要第73号として発刊することになりました。

本稿は「いのちの教育」を、身近なところから実践できるものとして「学校飼育動物」に焦点をあてて、これを見直し活用しようとしたものであります。

昔から、教科の学習のためばかりではなく、情操教育として、多くの小学校でウサギやニワトリを飼っていることが知られています。しかし今ほど切実に、生き物を扱う教育が重視されることはありません。なぜなら、子どもたちが自然に触れる機会がどんどん少なくなってきており、それに呼応するかのように「生きていること」の認識の不足が言われ出しているからです。「心の教育」特に「命の教育」が呼ばれる今、あたたかい血の通った動物とのふれあいは、子どもたちに生き物を実感させ、動物と仲良くなる楽しさを教えることでしょう。そしてそれは子ども自身の人格形成にもかかわってくるにちがいありません。

一方、最近、学校週5日制の影響を受けて、学校では辛い目にあっている動物たちが増えてきたとも聞きます。動物たちが幸せにくらしていてこそ、教育効果も大きいのですから、学校の管理者や担当者は、新動物愛護法の趣旨を意識するまでもなく、動物の健康や安全の確保をしていくべきであります。そのために、地域の獣医師との連携を考えていく必要もあります。

人間は、自然との共生を図っていかなければなりません。次世代を担う子どもたちには、自然に対する正しい認識や、自分たちが自然の一員であることの認識をもつてほしいと願ってやみません。県内の多くの教職員が、生き物を飼うことの意義を理解し、より教育的に活用していくことを期待しています。

最後に、本稿発刊にあたりご支援ご協力いただきました関係者各位に対し、心から御礼申し上げるとともに、更なるご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

平成17年3月

石川県教育センター
所長 浅田 秀雄



◀ 穴から顔を出すウサギ
(字ノ気小学校)

目 次

「石川の自然」第29集 生物編(14)発刊にあたって

I はじめに.....	1
II アンケート調査の概要.....	2
III 学校における動物飼育のあり方	
1 動物飼育の教育的意義.....	4
2 飼育上の課題	
(1) 休日の飼育.....	6
(2) 衛生管理.....	7
3 ウサギとニワトリの基本的な飼育法	
(1) ウサギ.....	12
(2) ニワトリ.....	15
(3) 鳥インフルエンザ.....	17
IV 学校飼育動物の教育への活用	18
V 県内小学校の飼育動物訪問	23
・ 加賀市立錦城小学校	・ 加賀市立作見小学校
・ 小松市立稚松小学校	・ 白山市立美川小学校
・ 金沢市立野町小学校	・ 金沢市立鞍月小学校
・ 金沢市立森本小学校	・ かほく市立七塚小学校
・ 内灘町立向栗崎小学校	・ 富来町立福浦小学校
・ 志賀町立加茂小学校	・ 輪島市立町野小学校
・ 珠洲市立上戸小学校	
あとがき	30
謝辞	30
参考文献	30

学校にくらす動物たち —学校飼育動物の教育的意義—

※中村雅恵・竹田 勉

I はじめに

「愛するものの死を通してしか、生きていることのすばらしさは伝わらない」

これは、旭山動物園長である小菅正夫氏が「命を伝える」というテーマで書いた文章のしめくくりの言葉である。はっとして、思わず襟を正さずにはいられない。

「生物愛護」「生命尊重」の心を育てることは、小学校では生活科や理科、道徳等に位置付いており、平成14年度からは、学習指導要録の行動の記録に「生命尊重・自然愛護」の評価項目が新設された。しかし、実際の学校教育活動の中では、生命尊重を言葉でしか伝えられないもどかしさを感じている教師も多いのではないだろうか。

小菅氏は、先の文章中で次のように述べている。

『命は覚えるものではなく、感じるものであり、幼児にウサギを触れさせると、不思議なことに多くの子が、ウサギを両手で抱え込み、頭を下げて全身で感じようとする。その瞬間に命は伝わったと思う。しかし、それだけでは命の大切さは伝えられない。命が決して後戻りしないことを知らねばならない。愛するものの死に臨んだときの心の苦しさが「かけがえのない命」を認識する大切で唯一の瞬間である。』と。

翻って考えるに、我々はこれまで、大切に飼っていた生き物が死んだときに、子どもたちが深く悲しむような教育活動をしてきただろうか。単にふれあい活動をするだけではなく、飼育の負担を厭わないだけの付き合いをしてこそ、死を悲しむことができ、そしてそのときに大人が正しく行動することによって命を伝えることが可能なのである。

「少ない動物を身近において、丁寧に最後まで飼う」というのが、小学校における飼育の基本である、と日本獣医師会の学校飼育動物委員会は提唱している。今、学校にいる動物たちが、正しく「動物愛護・生命尊重」の教育を実現するものとなるために、この調査研究を役立てていただければ幸いである。



何でもかじるウサギ

II アンケート調査の概要

アンケートは、国立教育政策研究所（平成15年、総括：鳩貝太郎）のものを参考に作成し、県内の小学校260校に対して、平成16年1月に実施した。回答者は、各小学校の飼育担当教員である。なおここでは、飼育動物を鳥類とほ乳類に限定した。

調査内容は、次のとおりである。

- 1 動物の種類、頭数、場所、繁殖制限、健康状態、様子、住環境、餌の種類、餌の場所・分量について
- 2 屋外飼育舎の地面の様子、広さ、屋根の素材、場所、設備されているもの、暑さ・寒さ・湿気対策について
- 3 担当教員の立場、担当児童の立場
- 4 担当児童の責任感と愛情
- 5 動物を飼育する上での課題
- 6 休日（土日、祝日）の飼育、長期休業中の飼育
- 7 動物が病気や怪我の際、動物が死んだ場合の対処
- 8 動物とふれあう活動の有無、教育活動の中の場面
- 9 教育上の正の効果と負の効果、正負の効果の割合
- 10 獣医師との連携の有無
- 11 動物の飼育・管理についての希望
- 12 学校獣医師制度の必要性

小学校227校（回答率87.3%）の回答を得た。そのうちの196校（86%）が調査対象飼育動物（ほ乳類・鳥類）を所有している学校であった。（表1）

そのうち、1種類の動物を飼育している学校は106校（54%）と半分を占め、2種類の動物のいる学校63校を含めると、86%となる。（表2図1）

表2 動物の種類数

	学校数	
1種類飼育	106	54%
2種類飼育	63	32%
3種類飼育	23	12%
4種類飼育	4	2%
	196	100%

飼われている動物の種類を見ると、ウサギが圧倒的に多く、4割近くを占め、ニワトリ・チャボが続き（各16%）それらをあわせると、所有学校数は全体の70%をこえる。また、哺乳類の割合は45%，鳥類の割合は55%となっている。

ウサギやニワトリ（チャボ）が多い理由としては、①飼いやすい②人に慣れる③入手しやすいなどが考えられるが、特にウサギは「かわいい」「おとなしい」など、子どもがかわいらしい条件を備えているからであろう。（表3図2）

表1 アンケートの回答概要

実施数	260校
回答数	227校（回答率87.3%）
飼育動物有り	196校（86%）
飼育動物無し	31校（14%）

図1 動物の種類数

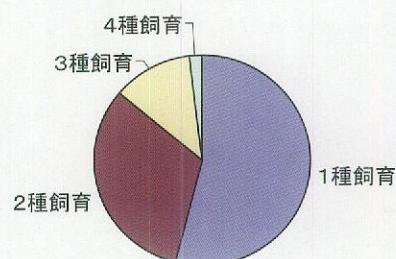
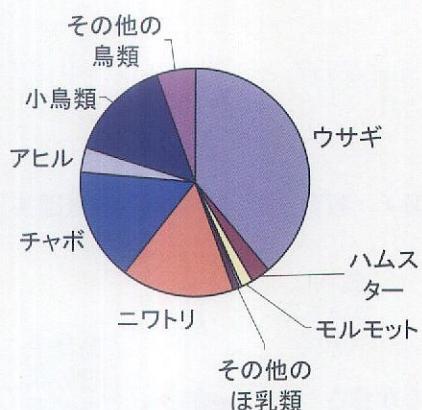


表3 動物の種類

図2 動物の種類数



	学校数	
ウサギ	123	39%
ハムスター	9	3%
モルモット	5	2%
ネズミ類	1	0%
その他のは乳類	3	1%
ニワトリ	51	16%
チャボ	50	16%
アヒル	12	4%
小鳥類	45	14%
その他の鳥類	18	6%
合計	317	100%



チャボ



ウサギ



ハムスター

所有する動物の個体数では、1つの種類につき何頭いるのかについて調査した。その結果、5頭以内が80%で多い。6頭以上の学校が20%あるが、動物の種類によっては、家族をもち、なわばりをもつものがあるので、個体数が多い場合は、トラブルを避けるための飼育上の工夫が必要である。(表4)

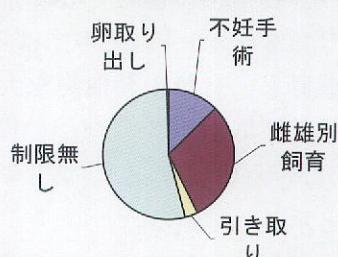
動物のいる場所については、82%の動物が屋外飼育舎に飼われていることが分かった。廊下や玄関等の場所には、小鳥類のケージが置かれていることが多い、教室に飼われている動物は、ハムスターやモルモットであった。



屋外飼育舎（作見小学校）

繁殖に対する対策としては、不妊手術を施している学校は13%にとどまるが、雌雄を別にして飼い、増えないようにしている学校が多い。制限無しには、1頭だけで飼っている場合も含まれる。(図3)しかし、実際には増えすぎて困っている学校もあるようである。

図3 繁殖に対する対策



III 学校における動物飼育のあり方

1 動物飼育の教育的意義

学校で動物を飼う理由は何であろうか。

飼育担当教員に、動物飼育の教育的効果を3つ挙げるよう尋ねたところ、3つの中に入った項目は多いものから順に次のとおりであった。(図4)

- ①動物愛護の精神が育つ
- ②生命尊重の心が育つ
- ③責任感が育つ
- ④思いやりが育つ

と続く。しかし、これらの中で最も強く思うもののをたずねると、「責任感が育つ」の項目が非常に多い結果となった。(図5)

のことから、「動物愛護」や「生命尊重」の心が育つことを、多くの教員が理解しているが、現状では、その効果をとらえきれていないことがわかる。

動物愛護と生命尊重

小学校学習指導要領(H.10)においては、生活科、理科及び道徳の中に、「自然愛護・生命尊重」にかかる記述があり、次のとおりである。

生活科…内容(6)「動物を飼ったり植物を栽培したりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に关心をもち、また、それらは命をもっていることや成長していることに気付き、生き物への親しみをもち、大切にできることがある。」

理科…目標第3学年と第4学年の目標に、「生物を愛護する態度を育てる」、第5学年と第6学年の目標に「生命を尊重する態度を育てる」と示されている。

道徳…目標生命に対する畏敬の念を培う目標のもとに、内容の3(1)において「身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する」(第1学年及び第2学年)「自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にする」(第3学年及び第4学年)「自然の偉大さを知り、自然環境を大切にする」(第5学年及び第6学年)と示されている。

また、平成14年度からの指導要録における

図4 教育上の正の効果(複数回答)

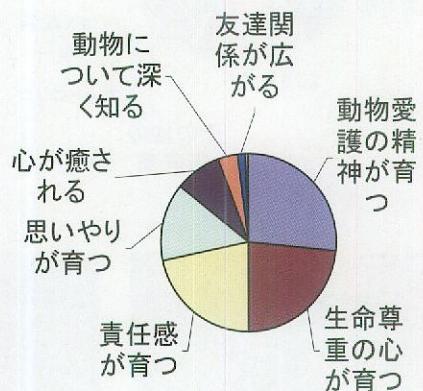
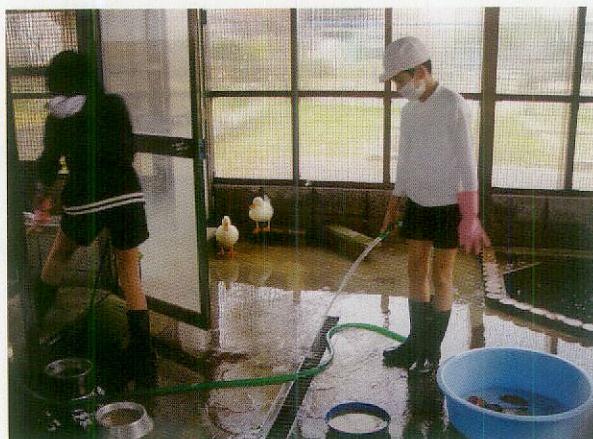
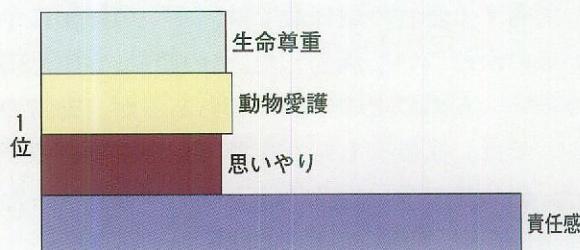


図5 教育上の正の効果を強く思うものから3つ選ぶと



責任をもって仕事をする飼育係(野町小学校)

「行動の記録」では、それまでの「自然愛護」を「生命尊重・自然愛護」へと項目が変更され、指導の充実が求められている。

このように、学校に動物を飼う場合、その意義は、まず動物愛護、そして生命尊重の心を育むことである。飼育動物が粗末にされる学校で、生命尊重の教育が実現することは考えられない。

自然愛護・生命尊重の教育にふさわしい飼育

右図は、各学校に動物とふれあう活動の多さを調査した結果である。飼育動物とのふれあいの活動をよく取り入れていると答えた学校は、7%であった。このことから、前述の動物飼育の意義から考えると、現在の学校での飼育の状態は、負担が大きい割には教育的に活用されていないのではないかと思われる。

児童が担えるだけの小さな負担で、大きな教育効果を上げることのできる飼育を考えていくことが必要である。そのためには、

少ない動物を、丁寧に最後まで飼う。

という方針で飼育をすることが大切である。中川（2003）は、それによって次のような効果が期待できると述べている。

- ・命の大切さを学ばせる……生命尊重 責任感
- ・愛する心の育成を図る……情愛教育 人の土台づくり
- ・人を思いやる心を養う……共感、感受性を養う 協力
- ・動物への興味を養う……知識欲の刺激 觀察力 洞察力 科学への入口
- ・生きる力を養う……ハプニングへの対応 工夫 判断力 決断力
- ・緊張を緩める……癒し 人間関係改善
- ・マザーリング（子育て体験）

2 飼育上の課題

アンケートによると、飼育担当者が挙げた課題は、

- ①長期休業中の世話（67%）
 - ②休日（土日祝日）の世話（65%）
 - ③衛生管理（48%）
- （数字は学校数に対する割合）

となっている。「休日の世話」と「衛生管理」が、大きな課題であることがわかる。

休日の飼育は、動物の衛生管理に深くかかわっており、衛生管理はまた動物の健康管理と密接にかかわっている。

ここでは、長期休業中も含めた休日の飼育についての課題と、衛生管理にかかわる課題について、その解決の方向を探ることとする。

図6 動物とふれあう活動の多さ

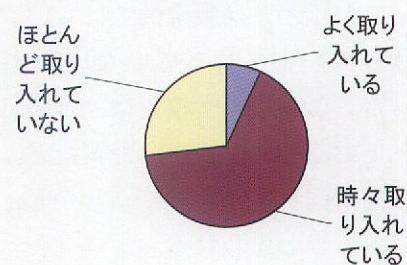
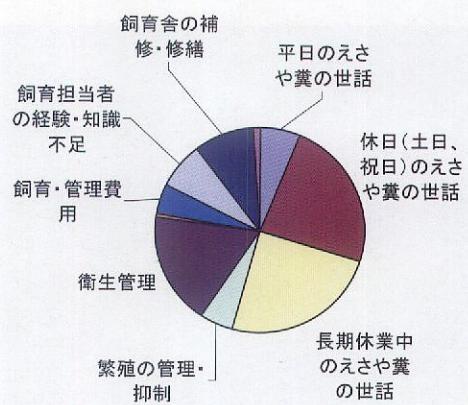


図7 飼育上の課題（複数回答）



(1) 休日の飼育

休日の飼育は誰が行っているか

調査によると、土・日曜日の飼育は、担当の教員と児童が行っていることが多い。長期休業中は、それらに加えて、全校の教員がかかわる学校もある。

長期休業中も平日であれば、負担はさほどではない。問題は、休日である。相手は命あるもの、放っておくことは教育的ではない。

休日に飼育を行っていないとする学校が20%あった。これらの学校では、金曜日に餌を多めに入れておくことが多い。野菜だと、すぐに傷むので、固形飼料と水を置く。しかし、これも苦肉の策であろうと思われる。

この課題を解決する方法は2つ考えられる。一つは、飼育の規模を縮小することである。前述のとおり、生命尊重の教育に直結する飼育のキーワードは、「少ない動物を、丁寧に最後まで飼う」ことである。その方針に従うなら、現在の動物たちを飼育舎から出して、いくつかの教室に分けて飼うという方法が考えられる。

ウサギまでの大きさであれば、1匹だけケージに入れて教室内飼育をする。休日は、希望の児童が交代で家に持つて帰って世話をする。児童はその間、動物とふれ合うことができる。もちろん、学級ではいろいろな問題がもちあがるだろう。それらを解決するために、話し合ったり工夫したりする全てのことが、大切な教育だと認識することが大切である。



移動は衣裳ケースで

図8 土日の飼育は誰が行っているか

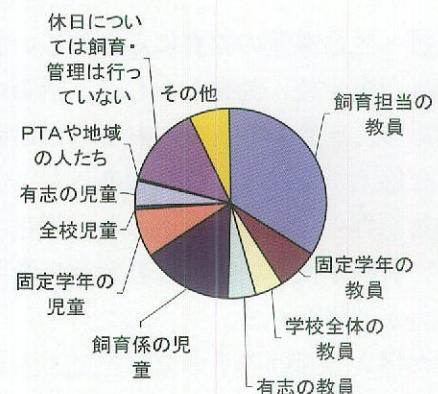
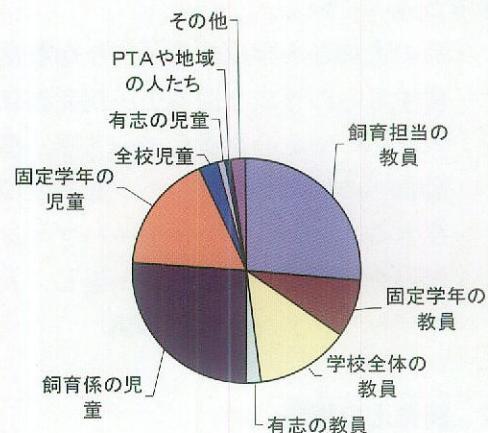


図9 長期休業中の飼育は誰が行っているか



ふだんはサークルの中で

休日の飼育の課題を解決するもう一つの方法は、多くの人の協力を得ることである。学校内の全職員が休日の飼育を担当するのもよいが、もっと視野を広げてPTA等、地域のボランティアの協力を呼びかけ、地域ぐるみで取り組むことも考えられてよい。これについては、神奈川県のある小学校での実践が、報告されている。(竜田2003)*

学校は体質上、外部に門戸を開くことに対しては慎重であるが、PTAの働きかけで思い切って募集してみると、多くの世帯が登録し、飼育が家庭教育の場になったという。一部の児童としか動物とふれ合えない現状を考えると、多くの人の手で飼育することになれば、自ずと教育効果も高まる。その際は、掃除や餌やりの手順を全体に示す等、誰でも取り組める体制を準備することを忘れてはならない。

(2) 衛生管理

動物たちの健康観察

動物たちが健康であればこそ、教育への活用も積極的に行われる所以であるから、飼われている動物たちが全体に不健康であると感じたときには、その原因を取り除く必要がある。

健康状態については、アンケートでは全体の85%の動物たちが健康であると判断されているが、全体に不健康であるという回答も3%ある。

不健康の原因として主に2つ考えられる。一つは、「動物の置かれている場所が清潔でなく、住みやすい環境でない場合」もう一つは、「1つの場所に住む個体数が多い場合」である。

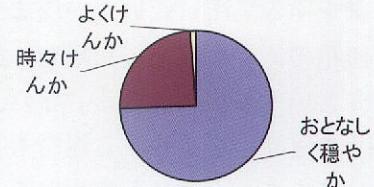
ウサギを例にとってみると、ウサギは高温多湿を嫌う性質があり、じめじめしたところにいるとそれがストレスとなり、病気にかかりやすくなる。また、日かけのない環境も健康に悪影響を及ぼす。

動物たちにけんかが見られるときは、特に「1つの場所に住む個体数が多い」という原因が考えられる。(図10) 動物たちのストレスが高ければ、やがて健康状態にも影響が及ぶ。飼育スペースを区切って個室を作るか、不妊手術を施すかあるいは、ケージなどに入れて分けてしまうことが考えられる。

ところで、動物たちの健康状態を判断するにはどうすればよいのだろう。「わからない」と回答した教師が約3%いるが、「すべて健康」と回答した中にも、動物の状態が見えていない可能性もある。専門家ではない教師や児童が、日々の様子を観察する際には、どのような判断基準があればよいのだろう。

簡単にいえば、「よく食べ、よく動き、よい糞をする」のが健康な証拠と言われている。食欲がなくなったり、動かなくなったりしたときは、要チェックである。特に下痢には注意が必要である。児童にも担当の先生に知らせることを指導する。

図10 動物の様子



ケンカで傷ついたウサギ

*竜田孝則「休日や長期休業中の飼育の改善」(2003) 鳩貝太郎・中川美穂子編. 学校飼育動物と生命尊重の指導. 教育開発研究所 PP.120-123

清潔な飼育舎

健康を守るために環境整備は、まず飼育舎を清潔に保つことである。

飼育舎の掃除について、「毎日きれいな所にいる」のは全体の58%である。「時々汚れている」の39%は、休日の飼育が行われていないことや、何らかの理由で、掃除が困難であることが原因と考えられる。(表5)

飼育舎は、動物にとってすみよい場所でなければならない。そのためには、世話をしている児童が、働きやすい場所にすることが、最も大切である。飼育舎が清潔になれば、動物は健康になり、児童の健康も守られる。何より児童が飼育を楽しく行うことができ、それ自体が教育となる。

では、掃除のしやすい飼育舎とは、どんなものだろうか。

個体数が多いと、それだけ汚れも多いことは単純に予想できるが、汚れ方には餌箱の場所と餌の量が重要な鍵を握る。

餌箱の場所と餌の量

餌箱の場所や餌の量が決まっていることは、重要なことである。餌箱が決まっていない場合、野菜なら無造作にばらまかれることになる。動物が野菜を踏んだり、床が土であれば砂まみれになったりして、傷みも早い。餌箱があっても、それが決まった場所に固定されていなかった場合、動物たちは好き勝手な場所で糞をする。ウサギの場合、その個体によって糞をする場所はだいたい決まっている。それが時に餌箱の位置と重なった場合、餌と糞が混ざってしまうという事態が起きる。また、1つのスペースに多くのウサギを飼育する場合も、糞の場所があちこちにできて、全体に不衛生になる。餌箱が一定の場所に固定されることにより、餌箱が汚されることなく、糞をする場所がほぼ決まり、そこがトイレとなる。掃除は、その辺りを集中的に行えば、能率的である。

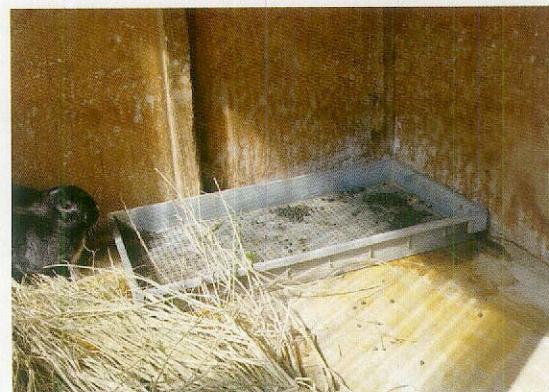
餌箱の形や大きさも動物が食べやすいものを工夫すると、汚さずに食べるようになる。一般的には、餌箱はすぐにひっくり返るような形や重さ、足を突っ込んで食べてしまうような大きなものは避けること、箱の位置は床の真ん中に置くより、壁に沿わせて置き、一方からのみ食べられるようにする」とが言われている。

このように、掃除をしやすくするために、まず汚れない工夫が大切である。

アンケートによると、餌箱を固定し、分量も一定にしている学校が66%であった。(図11) とはいって、餌箱は決まっているが必ずしも固定されているわけではなく、大体同じような場所に担当の児童が置く、という学校が多いようである。また、ペットフードについて

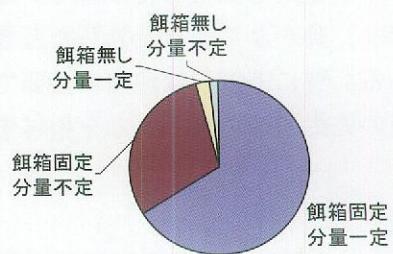
表5 飼育舎の掃除

	のべ学校数	
毎日きれいな所にいる	177	58%
時々汚れている	118	39%
いつも汚れている	9	3%
	304	100%



糞の場所が決まつくる
(上戸小学校)

図11 餌の場所・分量



は分量まで決めているという学校が、野菜については決めていないこともあり、実際の様子は、このデータからだけでは推し量ることはできない。

よくある例として、給食室や近くのスーパーから野菜をもらっている学校では、もらったその日は餌箱に野菜が山盛りになっているが、あの日は全くないなどと量にムラがあることがある。動物は計画的に食事をすることができない。一度に与えるのではなく、野菜を保存する工夫をして、できるだけ定量を与えるようにすることが望ましい。

ここで言う定量とは、ただ量を決めればよいというのではなく、「今いる動物たちが、ちょうど食べきれる量」のことである。この量を調べるのも、大切な飼育の学習である。

ニワトリ等は順位が決まっており、強いものが優先的に餌を食べる。いつも餌にありつけないものがいないかを調べるとよい。弱いものの存在が見つかれば、飼育の仕方を改善するきっかけとなる。

児童の残したパンを餌として与えている学校もあるが、残ってカビが生え不衛生になることが多いので、気をつけなければならない。教師にしてみれば、残したパンを動物たちに与えることは、教育的であるように思われるが、動物のことを考えると量は残らないよう控えめに、また丸ごと置くのではなく細かくして与える等、動物に対する思いやりの態度を児童に示したい。

掃除のしやすい床

次に、掃除のしやすい床について考える。

アンケートによると、コンクリートが48%、次いで土が38%である。(図12)

床がコンクリートであればスコップで糞をこそげ取り、ほうきとちりとりで取り除くことができる。一方コンクリートは掃除がしやすいという長所がある反面、水洗いすると水がたまり、湿気の多い環境となりやすい。水で洗うタイミングと水を切る工夫が望まれる。

児童はコンクリートの床に水をまいてデッキブラシでこすることは好きである。その際、2つの点で注意したい。1つは、水をまく前に、糞や餌くずなどを、ほうきで掃き取ってしまうこと。それを怠ると、排水溝や排水管が詰まり、使えなくなってしまうこともある。もう1つは、水をまいて掃除をしたあとは、できるだけ水を切るようにする。アヒルのような水鳥以外は、湿気を嫌うものが多い。できれば、水をまく掃除は乾燥した日が望ましい。

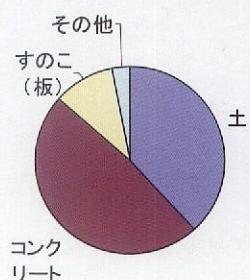


餌を全部平らげる動物たち
(七塚小学校)



計画的に野菜を与える
(野町小学校)

図12 屋外飼育舎の地面の様子



乾きの早い防水コンクリートにしている学校もある。全国学校飼育動物研究会※では、学校での簡単な掃除のためには、この防水コンクリートを利用することを提案している。

床が土、というのは掃除をする者にとって厄介である。土と糞が混ざってしまうからである。土の上の汚れを搔き取るには、熊手が役に立つ。しかし、土の床は、きれいにならず、負担感が大きいため、児童の勤労意欲が高まらないことがよくある。

土は「最も自然に近くて良い」と思われるが、動物にとって最適な状態にしておくことは、骨の折れる仕事である。特にウサギは、地面が土だと穴を掘って、外へ出てしまったり、落盤事故を起こしたりすることがあるので注意しなくてはならない。中には、穴を掘って困るので、鉄板を敷いて、その上に土をかぶせたという学校もあり、苦労がうかがえる。

また、コンクリートの上に砂を敷き、時々砂を取り替えているという学校や、コンクリートの一部が砂場になっている学校もあった。土は、動物にとって大切な足休めになるので、土を踏む機会も与えてやりたい。世話をできる範囲で土を用意するのがよいだろう。



ウサギの掘った穴（落盤直前）



防水コンクリートの床
(向粟崎小学校)



小型の熊手 (加茂小学校)



穴掘り名人のウサギ

コンクリートの上にすのこを敷いて、風通しを考えた学校もあった。すのこの場合、動物の足がすのこのすき間に落ちないものにすること、掃除の際にすのこをきれいに洗うことが必要になってくる。

※全国学校飼育動物研究会　　学校における飼育動物や動物介在教育の在り方についての研究や実践を推進するとともにそれらの交流を深め、学校教育の発展に寄与することを目的として、平成16年8月29日に発足した。鳩貝太郎（国立教育政策研究所総括研究員）を代表発足人とし、宮下英雄（聖徳大学人文学部教授）を会長として、全国の獣医師会、教育関係者を中心とした会員からなる。

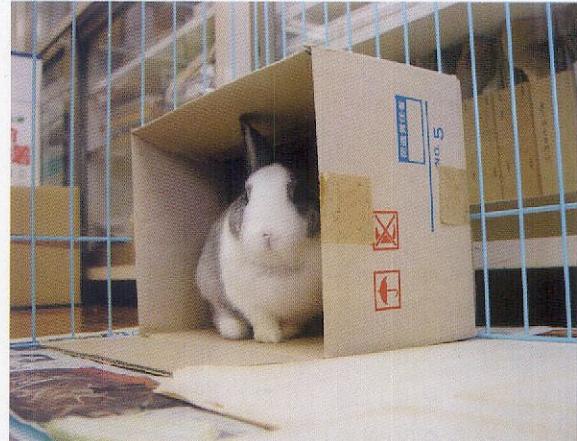
すみやすい広さ

飼われている動物の種類や頭数にもよるが、1頭あたりの広さが大きければ、もちろん動物たちはゆったりと暮らすことはできる。その場合、隠れ家となる小さな区切りを作ると動物たちは安心する。ウサギなどは、本来穴を掘って生活する動物であるため、何もない広々としたスペースは、身を隠す場所のない不安を抱えることになる。

動物にとって重要なことは、自分のなわばかりの存在であり、1頭ずつが区切られていれば、広さ自体はそれほど問題ではなさそうである。

ウサギの場合を例にとると、オスを何匹かいっしょに飼うとすると、4畳ぐらいの広さがあっても2匹からせいぜいで3匹と言われる。メスが混じると、それでも争いが起こる。そう考えると、小さく区切った場所をとりあえずつくるのが、すぐにでも実行できる方法である。

ケージで飼う場合、運動ができる工夫が必要である。1日に1回は、外に出すようにする。



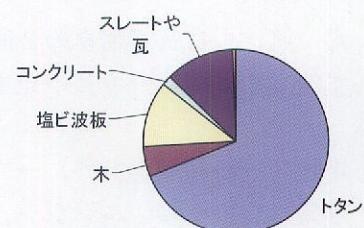
すぐに箱に逃げ込む

暑さ・寒さ・湿気への対策

アンケートでは、全飼育舎の68%がトタン屋根であった。トタンの屋根は、熱を伝えやすいことから、室内の寒暖の差が激しい。飼育舎のそばに大きな落葉樹があれば理想的であるが、真夏の日中の高温を防ぐため、風通しをよくする、真冬の寒さを防ぐため、身を隠す木箱を入れる等の対策が望まれる。

本県では、冬の降雪から動物たちを守るために、囲いをする学校が多い。校務士さんの協力が欠かせない。

図13 屋外飼育舎の屋根



大きな飼育舎（錦城小学校）



雪と寒さを防ぐ囲いを取り付ける
(向粟崎小学校)

3 ウサギとニワトリの基本的な飼育法

(1) ウサギ

特徴

ハーレムをつくり、オスが複数のメスを統率して生活する動物である。したがって、オス同士の争いは必然的に起こる。過密状態を避け、オスの隔離飼育をする。

また、繁殖力が強い。過密状態を防ぐためには不妊手術が必要である。



足をきれいにしているウサギ

雌雄の鑑別

①生後4ヶ月まで

尿道の開口部の位置で判別を行う。オス・メスを見比べないと判別が難しい。

オス：肛門から遠い。丸く見える。メス：切れ長。

②生後4ヶ月以降（オスの判別）

お腹を肛門の方に絞るようにする。オスであればお腹に入っている睾丸が皮下に出てきて、触ることで確認できる。

③成熟後（オスの判別）

陰部を指で圧迫すると、ペニスが突起状にあらわれる。去勢したものでは、ペニスの先端が広がり、その形状はメスのように見えるが、やはり陰部より飛び出ている。

餌と給水

交換は、水・餌ともに毎日朝夕の2回実施する。

容器を必ず洗うことで苔やカビの発生を防ぐ。

①餌の種類

・ウサギ用配合飼料（固形飼料）→ 高カロリー

・野菜　与えて良いもの：ニンジン、ブロッコリー、パセリ、セロリ、カブの葉、チンゲン菜、ダイコンの葉、サラダ菜、サツマイモの葉、キャベツ等

与えてはいけないもの：球根類、生の豆類、ジャガイモ等（中毒を起こす）

生の芋類、豆類等（消化が悪い）

小松菜などのカルシウムの多い野菜（尿路結石の予防のため）

・青草、干し草

②餌の適量と配分

・普通のウサギ　体重2～3kgの場合、1日に100～120gの固形飼料を与える。（体重の5%が目安）。不足分は野菜、青草を与える。

・妊娠・授乳期、成長期のウサギ　固形飼料を多めに与え、野菜、青草、干し草を補う。

③給水

・50～150ml／1日・体重1kg

・夏期や妊娠授乳期は多めに与える。

・大きい容量の、ひっくり返らない容器にする。

・ケージでは給水びんがよい。



児童も知っている
シロツメクサ

飼育舎での飼育

①飼育数

多頭飼育は、糞尿、餌の残りなどによる汚れが激化し、児童の手入れの意欲が失われる。

また、動物はストレスを受け、攻撃性が高まり傷つけ合う。

オス・メスを分けて飼育したり、避妊・去勢手術を施したりして、妊娠の可能性を下げ、頭数を制限する。去勢によりオスの性質も穏やかになる。

子ウサギは、メスの妊娠の可能性のない生後3ヶ月までに里子に出す。引き取り手がない場合は妊娠させない。

②巣箱

ウサギが落ち着く。また防寒の目的もある。1匹につき1箱、小さなものでよい。

③糞の始末

本来ウサギは場所を決めて排糞する性質を持つが、飼育数が多いと糞場を決められず糞が散乱する。

毎日掃き掃除を実施。必要に応じて散水してデッキプレシで掃除する。飼育舎外にウサギを出して実施し、床が乾いて、餌・水が整った状態にする。



箱があると落ち着く

教室内の飼育

ケージ等での飼育は、大仕事にならないので、世話が行き届く。アレルギーなどの心配面も小さくなる。身近にあることで、特に、情操面の教育効果がある。オスを隔離する目的もある。

①ケージ

・尿対策をきちんとする。

ウサギは多尿である。尿受けとその洗浄は欠かせない。ケージの下にも新聞紙等を用意。

・ウサギの足は落ちずに、糞は落ちる床が便利である。(金網すのこ等)

②ケージの置き場所と温度管理

・窓から離れており、温度差の少ない場所。理想的な温度は18.3~23.9℃。29℃を超えると体温の放散がうまくできなくなる。

・湿度は30~50%が理想。

・日光浴をさせるときは、熱射病に注意する。ケージの半分を日陰にし、自由に移動できるようにする。

③留意点

・1日1回30分以上は、教室内で運動させるとよい。

・かじられて困る電源コード等の対策が必要である。



箱をもっていかないで！

出産と子育て

①成熟期間 メス 生後4ヶ月 オス 生後5ヶ月

②妊娠期間 ほぼ1ヶ月

③妊娠の成立 出産適期は7ヶ月齢~3歳

雌雄が5日間ほど一緒にいれば確実に妊娠。

交尾排卵(交尾により排卵がおこる)。また、出産と同時に妊娠可能。

交尾可能周期は15・16日

④妊娠期間中の注意

・妊娠期間は28~36日

- ・交尾後、オスを隔離する。

出産中のメスを、オスが交尾を求め追いかけ回すため、新生児に危険である。

- ・固形飼料中心の給餌。

水を十分に与え、干し草、野菜も加える。

- ・早めに巣箱を設置

母ウサギが横になって授乳したり、歩いたり座ったりできる広さのものが良い。広すぎるのも良くない。

⑤出産時の注意

- ・出産2・3日前に巣作りを始める。

- ・妊娠後期から出産後2週間は母ウサギを落ち着かせることで、子育ての放棄を防ぐ。

巣箱をのぞかない、手を入れない。子ウサギに触らない。

⑥子育てと子ウサギの成長

- ・授乳は1日1回、人が見ていないときに行われている。子が成長していれば授乳していると判断できる。

- ・誕生後4・5日 うぶ毛が生えそろう。

- ・7日 耳が聞こえる。

- ・10日ほど 眼が開く。

- ・18日 親とともに巣外へ出る。柔らかい葉を食べる。

- ・42~56日（目安は45日）で母親を離し、離乳させる。寒い時期や梅雨時は多少遅らせる。この時期にいろいろなタイプの餌を与えると将来何でも食べられるようになる。

ウサギとのふれあい

ウサギは本来、捕食される動物なので、基本的に抱かれるのは好きではないが、慣れさせることはでき、人とふれあうほど、ウサギはおとなしくなる。ウサギがいやがって暴れる場合は、その日は抱くのをやめ、翌日から少しずつ慣れさせていく。

児童が、ウサギの鼻先に指を出すとかまれることがあるので、注意しておく。

ウサギの抱き方

膝に乗せるまで：

- ・しゃがんだ姿勢でウサギの背後から近づき、両手でウサギの脇の下を持ってすぐに膝の上に載せる。

膝に乗せた後：

- ・膝の上で、ウサギを横向きにして抱える。
- ・頭が向いている方の腕と胸でウサギが前に出ないように抱え込み手でウサギのお尻を包み込む。もう一方の手でウサギのからだが丸く保てるよう、ウサギの背中から頭を上げさせないようにすると、ウサギは落ち着く。ウサギを抱く人の胸にもたれさせると、より落ち着く。

ぶら下げたままにしない。

低い姿勢で抱く

強く抱きしめない



足とおしりを固定する



ひざにのせる



首の後ろをつまむ

(2) ニワトリ

特徴

群で生活し、オスが家長の役割を果たす。メスやヒナに対して、餌の獲得や危険対応に尽力する行動が観察できる。しかし、成長したオスは排他的に扱われ、ケンカが起こる。世代交代（家長交代）により、前家長は排除されるので、メスを1羽つけて隔離飼育する。



レグホンは大きい

親鳥の飼育法

①飼育数

- ・4畳以上のスペースに1家族（オス1羽とメス2羽）

②飼育舎内の環境

- ・止まり木

- ・巣箱を置く棚

巣箱は雨風の当たらない場所に設置する。ヒナが孵化したら巣箱は地上に降ろす必要がある。

- ・砂浴び、足休めの土場

③餌

- ・養鶏用の配合飼料を主食に、青草や虫、貝殻を補う。

粒状の配合飼料 よく食べるが、消化吸収はよくない。

採卵鶏用の配合飼料 産卵時期に青草を与えると、卵の味にこくが出る。

- ・飼育舎外で虫や青草を自由に食べさせる。

④餌箱

- ・ニワトリが入り込めず、隣のニワトリが食べている姿が見えない餌箱が望ましい。

餌を脚で掘り返し、よりよい餌を探す習性があるため、入り込めない大きさであること。

また、強いメスの独占を避けるため、隣が見えない工夫ができるとよい。

⑤給水

- ・金網に掛ける鳥用の水飲みや、ニワトリ用の水飲み容器がよい。

- ・ヒナがいない時期は、浅く口の広い容器でもよいが、縁に乗ってひっくり返されない工夫が必要である。

⑥掃除

- ・床は掃き掃除の後水を流して洗う。土場の土は汚れたら交換する。

産卵・抱卵・孵化

①成熟期間

メスは生後21週齢で産卵はじめる。

②配偶行動の開始

雌雄とも7ヶ月過ぎ。

③産卵の期間

・レグホンは、ほぼ毎日産卵し、1歳くらいをすぎると数が減り、1歳半過ぎで産卵しなくなる。

・チャボは、年2・3回産卵し、10歳くらいまで続く。

④抱卵・孵化

・レグホンは、抱卵しないので、産卵後5～7日以内に人工孵化を行う。温度38～39°C、湿度50～60%を保ち、1日に数回転卵させる。検卵は5・6日後（血管の形成）、11日頃と18日頃（胚の運動）に実施する。その際、死亡したものは取り除く。正常であれば、21日で孵化する。

- ・チャボは、産み始めは抱卵せず、卵が7・8個になった頃に抱卵を開始する。ヒナが欲しいときは温める卵の数を3・4個に制限する。自由にさせておくと、抱卵しきれないほど卵を産み、殆どが発育できない状況になる。

子育て

①餌の種類

初生ヒナ用（3～4週齢まで）、中ヒナ用（3ヶ月はじめまで）、大ヒナ用（4ヶ月終わり）とあるが、中ヒナ用以外は入手困難である。初生ヒナに中ヒナ用餌を与える場合は、ポンラクト（大豆からできた粉ミルク）や魚粉を全体量の2割ほど加える。

②親のいない場合の子育て

- ・時期 春か秋
- ・給餌 初日は必要なし。2日目から初生ヒナ用餌を与える。
(当初は日に3回)
- ・水 浅くて、ヒナが入れない長細い形の容器に入れる。当初は餌と一緒に日に3回与える。
- ・水濡れ対策 ヒナが水に濡れると、体温の低下により体力が消耗し死亡する。容器の工夫が重要。濡れた場合はドライヤーの弱い温風で乾かす。
- ・飼育箱 温度管理のしくみと自由に出入りできる出入り口をつける。深めの段ボール箱で良い。
- ・温度管理 ヒヨコ電球などでおこなう。
第1週は33℃。
翌週以降、1週間ごとに3℃ずつ、常温に達するまで下げていく。

③親が育てる場合の子育て

飼育舎外等で虫やミミズをとることが十分できる場合は、親鳥用のエサがあればよい。そうでない場合は、必ず初生ヒナ用餌を用意する。

孵化後2日目から親鳥がヒナを餌場に連れ出す。親鳥は餌をついぱむことをヒナに教え、虫やミミズなども与える。

ニワトリのしつけ

- ・飼育舎外に出されたニワトリは、飼育舎がきれいに整備され餌があれば自分で戻ってくる。
- ・戻らないときは、餌の容器を見せて招き入れる。または、数名で協力して、手を大きく広げて飼育舎に追い込む。
- ・児童がオスのニワトリから攻撃されることを避けるために、メスをつけて飼育する等イライラしない環境をつくる。
- ・メスにも序列があり、つつきあいで維持される。乱れたときつつきあいが激しくなる。
収まらないときは分けて飼育する。
- ・1家族に1部屋を確保して安心して暮らせる環境をつくる。

ニワトリとのふれあい

ニワトリは人間を自分と同等のものと考えている。人間の顔の識別ができ、自分の名前を覚え、呼ばれると飛んでくるようになる。間近で鳥の顔（目）を見つめると、つかれることがあるので、気をつける。

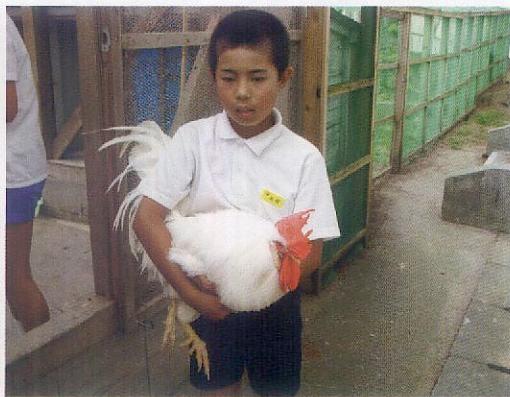
ニワトリの抱き方

驚かさないようにしゃがんで優しく近づく。

ニワトリのからだを背後から羽ごと両手で大きくつかみ、包み込むようにして抱える。

羽と足をおさえる
ように抱く

バスタオル等を膝に置
いて抱くと爪があたら
ず、安全である。



日頃からの信頼関係が大切



(3) 鳥インフルエンザ

平成16年1月、国内の鶏からの高病原性鳥インフルエンザの発生が確認された。その報道による保護者の関心が学校に飼育されているニワトリに向けられたことは、記憶に新しい。

国からの通知等では、鳥インフルエンザに関する予防を徹底させようとしながらも、過剰に反応することなく冷静に対処するよう呼びかけている。しかし、やはり全国の学校の中には、風評によりニワトリやチャボを処分したところもあるという。

この時、県内のそれぞれの学校において、どのような取り組みがなされたのだろうか。

内灘町立向栗崎小学校は、15羽のニワトリ・チャボを飼育している。町の獣医師制度により校医となっている獣医師に指導を仰ぎ、鳥インフルエンザについての正しい知識を得たうえで、教職員の共通理解を図ることができた。実際には、児童の活動をしばらく停止し、教職員が交代で飼育を行うこととしたが、獣医師の存在により、冷静に対処でき学校に対する地域の混乱もなく、鶏も健康にすごすことができた。

16羽のチャボ・ウコッケイを飼育している志賀町立加茂小学校でも、校長のすばやい判断で、保護者に対して、飼育に関するお知らせを発行し、学校の対策を明らかにした。児童の活動をしばらく休止し、小屋を消毒し、徹底した足洗い・うがい・手洗いによる飼育が行われた。しばらくは、1日あたり4回の鶏の健康観察を実施したという。

石川県獣医師会は、学校向けにニワトリの世話の仕方をポスターにしたものを作った。山口県でも県民に向けて、次のようなことを挙げている。(山口県ホームページより1部省略、括弧は筆者)

- ①鳥小屋の中に野鳥が入らないように、開口部をネット等で覆う。
- ②鳥の餌を入れた入れ物等を、野外に放置しないようにする。
- ③鳥の健康観察を十分行い、死亡が増える等の異常があった場合は、保健所や獣医師に連絡する。
- ④鳥小屋内に専用の履き物を用意し、出入りの際に履き替える。(病気を持ち込まない)
- ⑤消毒は、逆性石鹼を200~500倍に希釈、噴霧器等で小屋全体にかける。

今回の鳥インフルエンザの発生によって、改めて知らされたことは、「飼育舎を清潔に保つこと」、「飼育の前後に手洗いをすること」という、ごくあたりまえのことであった。このことが、今後の飼育活動においても続けられることが重要である。

IV 学校飼育動物の教育への活用

鳩貝（2001）は、「生命尊重の心」を「人だけでなく人以外の動植物などの命を大切にするとともに、命の持つ不可思議さを知り、畏敬の念をもち、命あるものを慈しみ、大切にする気持ちや態度までも意味するとともに、自他の人間の尊厳を認め平和を追求すること、様々な生き物とその一員である人の生活の基盤である自然を大切に守ることなどをも含む幅広い概念として捉える」と述べ、その上で、教材構成として段階的に次の3つの視点を挙げている。

- ・生き物から学ぶ …… 生き物が自分と同じように生命を持っていることに気づき、自然や生き物への親しみを持ち、それを大切にすることを具体的に学ぶ。
- ・生き物について学ぶ … 理科を中心にして、生き物や生命について、科学的にしかも体系的に学び、理解を深めるとともに、科学的な見方や考え方、判断力を養う。
- ・生き物のために学ぶ … 自分と他人、自分と生き物、自然界の相互関係や共存・共生の在り方について学び、実践する態度を身に付ける。

そこで、上記3つの視点から学校飼育動物（ここではウサギを例にあげる）を教材化した。



ウサギを教材として

生き物から学ぶ <小学校生活科学習指導案>

1. 単元名 いきものとなかよくなろう

2. 単元のねらい

動物を飼うことを通して、動物の育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、また生命をもっていることに気づき、生き物への親しみをもち、大切にすることができるようとする。

3. 指導のポイント

生きものを愛護する気持ちは、単に1回だけのふれあい活動をするのではなく、実際に世話をすることによって深まる。飼育の仕事は決して楽なことばかりでなく、時には自分の都合をおさえて、相手（生きもの）を優先させることも必要になる。このような活動を支えるのは、児童の生きものに対する親しみの気持ちである。しかし、児童の中にはそれまでの生活経験の中に、小動物と触れ合ったことのない児童も多く、いきなり出会わせると、どのように接してよいのかわからず、かえって自信をなくしてしまうこともあります。出会わせ方には工夫が必要である。

この単元は、ウサギを学級で飼育することを意図し、本時は児童がウサギに期待をもつ段階として設定している。

4. 単元の指導計画（総時数7時間）

- 第一次 ウサギとなかよくなろう …… (1時間) … 本時
- 第二次 ウサギにさわってみよう …… (1時間)
- 第三次 ウサギを教室で飼ってみよう …… (3時間)
- 第四次 ウサギを誰かに紹介しよう …… (2時間)

5. 本時の学習

(1) 題 目 ウサギとなかよくなろう

(2) ねらい

ウサギに親しみをもち、「触ってみたい」「飼ってみたい」という願いをもつ。

【生活への関心・意欲・態度】

ウサギと仲良くするには、ウサギの好きなことを知り、相手の気持ちになる必要があることに気づく。

【身近な環境や自分についての気づき】



タンポポ

(3) 準備するもの

- ①ウサギの紹介画像
- ②ウサギの食べ物（タンポポやシロツメクサ等）
- ③ウサギの抱き方の画像

(4) 展開

時間	学習過程	児童の学習活動	教師の指導・支援	評価規準
10分導入	1 今日の学習課題を把握する	<ul style="list-style-type: none"> ○ウサギが今日の学習であることを知る ○ウサギについて知っていることを話す 	<ul style="list-style-type: none"> ・「みんなに紹介したいものがあります」 ・ウサギの紹介 ① 	
30分展開	2 ウサギとのふれあいに必要なことを知る	<ul style="list-style-type: none"> ○ウサギとなかよくなるにはどうすればよいかを考える 食べ物をあげる 抱っこする 一緒に遊ぶ ○ウサギはどんなものを食べるのかを知る ニンジン キャベツ タンポポ 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分だったら何をしてあげたいか」「どうされたいか」をもとに考えるよう促す ・ウサギの食べ物 ② ・実際の植物を見せる ・シロツメクサやタンポポなど野原で見つけたら持ってくるように動機づける 	
	3 ウサギとのふれあいに際して気をつけることをウサギの気持ちになつて想像する	<ul style="list-style-type: none"> ○ウサギはどんなふうに抱けばいいのかを知る 足とおしりを固定すると安心するよ ○ウサギとふれ合う おどろかさない姿勢を低くして 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウサギになった気持ちで、どのように接してほしいかを想像させる ・ウサギの習性なども紹介しながらウサギをもっと知りたいという気持ちをもたせる 	<p>【身近な環境や自分についての気づき】 ウサギの立場で、気持ちを表現できる(発言)</p>
5分まとめ	4 ウサギとのふれあいに際して気をつけることをまとめる	○ウサギに手紙を書く	<ul style="list-style-type: none"> ・ウサギに、何をしてあげたいかを中心に書くように促す ・ウサギが怖い子どもにも、ウサギに対する自分の気持ちを書くようにさせる 	<p>【生活への関・意・態】 ウサギに対する気持ちが表れている(文章)</p>

生き物について学ぶ <小学校理科学習指導案>

1. 単元名 動物のからだのはたらき

2. 単元のねらい

人及び他の動物を観察したり、資料を活用したりして、呼吸、消化、排出及び循環の働きを調べ、人及び他の動物の体のつくりと働きについての考えをもつようになるとともに、命を尊重する態度を育てる。

3. 指導のポイント

本時までに、人の体を中心にして体の働きを学習してきた。その知識をもとに、ウサギの体について知り、人とウサギの体の働きの共通点や差異点を明らかにすることによって、動物の体についての理解を深め、科学的な見方や考え方を身に付けることを意図している。また、ウサギの体についての知識を得ることにより、動物の体のたくみさに気づき、生きていることの神秘さを感じるようにしたい。

本時は、ウサギを学級に持ち込み、獣医師をゲストティーチャーとして招き、扱い方の指導を受けながら、児童にウサギの体を調べさせる。ウサギに対する獣医師の態度等からも命の大切さを感じ取ることができるよう配慮する。

4. 単元の指導計画（総時数14時間）

第一次 人や動物が生きるのに必要なもの (1時間)

第二次 呼吸の働き (4時間)

第三次 消化の働き (3時間)

第四次 心臓と血液の働き (3時間)

第五次 まとめ (3時間)

1時 人の体の働きをまとめよう

2時 ウサギの体と人の体（本時）

3時 単元のふり返り

5. 本時の学習

(1) 題 目 ウサギの体と人の体

(2) ねらい

ウサギの体について調べ、本単元の既習をもとに人と動物に共通する働きを理解する。

【自然事象についての知識・理解】

ウサギと人の体の働きのたくみさを感じ、生きていることのすばらしさを感じる

【自然事象への関心・意欲・態度】

(3) 準備するもの

①人の体の働きをまとめたもの

②ワークシート

③気体检知管、ビニール袋、麻酔用マスク、ウサギ

④心音計

(4) 展 開

時間	学習過程	児童の学習活動	教師の指導・支援	評価規準
5分導入	1 今日の学習課題を把握する	○ウサギと人の体の働きの同じところと違うところを見つけよう ○予想してワークシートに書く	・人の体の働きをまとめたものを提示し、考えやすくする	

		「人もウサギも……でも……が違う」という書き方をする	・人の体の働きをまとめたもの① ・ワークシート②	
35分 展開	2 ウサギと人の体の働きの共通点と差異点を予想する 3 ウサギを使って確かめる	<ul style="list-style-type: none"> ○獣医師により、扱い方の指導を受ける ○ウサギの呼吸について確かめる <ul style="list-style-type: none"> ・人もウサギも呼吸しているでも呼吸の回数が違う？ ○ウサギの消化について確かめる <ul style="list-style-type: none"> ・人もウサギもものを食べて、ふんをするでもウサギは植物しか食べない ○心臓や血液の働きについて確かめる <ul style="list-style-type: none"> ・人もウサギも心臓は血液を送り出しているでも脈拍のはやさがちがう？ ○ウサギの体について、その他の質問を獣医師さんにする 	<ul style="list-style-type: none"> ・わからないところは、疑問の形で書くように促す ・呼吸、消化、心臓や血液の働き、その他の4種類に分けて整理する ・呼吸をしているかどうかを観察させる ・獣医師が、ウサギの呼気を集め、気体検知管等で二酸化炭素の増加を確かめる演示実験をする ・獣医師の指示通りに行う <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 5px;">・気体検知管等③</div> <ul style="list-style-type: none"> ・獣医師がウサギの「食糞」について話し、消化のしくみの巧みさを知らせる ・ウサギの耳の内側を観察させ血液の通り道を見つけさせる ・獣医師がウサギの心臓の音を心音計によって聞かせる ・人の心音と比較させる <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 5px;">・心音計④</div>	<p>【知・理】 動物の体の働きをまとめることができる（ワークシート）</p>
5分 まとめ	4 ふり返り、感想、お礼の手紙を書く	○ワークシートに学習したことを書く	・呼吸、消化、心臓や血液の働き、その他の4種類に分けて書かせる	<p>【閑・意・態】 生き物に対する驚きや感動が表れている（文章）</p>

＜参考＞

ウサギの食糞（再摂取性）について

ウサギは2種類の糞をする。1つは硬糞で、通常我々が目にする黒くて丸い糞。もう1つは軟糞（盲腸糞）といって、普段は目にすることがない。というのは、ウサギが直接肛門に口を付けて飲み込むのである。

これは、糞というより盲腸に蓄えられた貴重な栄養源で、蛋白質やビタミンB, Kが大量に含まれている。腸を2度通過させることで無駄なく吸収できるようになっている。

このしくみは、本来外敵の多いウサギが、頻繁に野に出ることなく栄養を摂取できるという利点もあり、動物の体の働きの巧みさを感じさせる。



食糞するウサギ

生き物のために学ぶ <小学校道徳学習指導案>

1. 主題名 学校にくらす動物

2. 主題設定の理由

動物の飼育は、生命尊重を実践する場であることは言うまでもない。しかしそれは、ただ与えられた仕事を責任をもってこなすことで終わらせてはいけない。自分の行動が相手（動物たち）にどう伝わっているのかを考えることが想いやりであり、愛護であり尊重である。そして、自分たちの都合と動物の都合を、どちらも考えることが共生への道である。

3. 指導のポイント

飼育活動を学年に任されているという設定である。飼育舎のウサギ2羽が本学級の担当であり、全員で飼育活動を行うことを目標にしている。自分だったら、この飼育舎の環境で暮らすことをどう考えるかを視点にして、人と動物の共通した想いや異なる想いを出し合うようする。

4. 本時のねらい

動物の立場に立って、飼育舎の環境を見直し、動物が心地よく暮らせるために、自分たちに何ができるかを考えようとする態度を育てる。

5. 準備するもの

- ・飼育舎の様子を撮影した画像を数枚

6. 展開

時間	学習過程	児童の学習活動	教師の指導・支援	評価
10分 導入	1 今日の学習課題を把握する	<ul style="list-style-type: none"> ○飼育舎にくらすウサギの様子を想起する ○ウサギたちは何を望んでいるかについて考える 	<ul style="list-style-type: none"> ・飼育舎の様子を撮った画像を提示し、考えやすくする ・飼育舎の様子 	
30分 展開	2 ウサギのくらしについて話し合う	<ul style="list-style-type: none"> ○食について考える <ul style="list-style-type: none"> ・お腹いっぱい食べたいな ・前の日の残りはいやだな ・いろんな種類の食べ物が欲しい ○住について考える <ul style="list-style-type: none"> ・いつもきれいな部屋がいい ・暖かい家がいい ・日当たりのいい部屋がいい ○安全について考える 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分だったらこのくらしさはどうかについて考えさせる ・人にとって心地よいことは、ウサギにとっても心地よいことを知らせる ・なぜそう思うか、どうしてあげればよいのだろうか、と問い合わせ、想いを深める ・ウサギは糞の場所が決まっていることを知らせ、トイレを作ることで、清潔な部屋にできることを話す ・ウサギの習性について必要な知識を与える 	
5分 まとめ	3 今後どのようにウサギとつきあっていきたいかを書く	○ワークシートに学習したことを書く		ウサギに対する想いやりの気持ちが表れている (文章)

V 県内小学校の飼育動物訪問

アンケートに協力いただいた小学校の中から、13校について実際に訪問し、取材を行った。

加賀市立錦城小学校 一カモがいる学校一

広い飼育舎は、運動場に面しており、玄関の脇にある。大小2つの部屋から構成されている。10畳ほどもある大部屋は、床がコンクリートで池と砂場がある。

この中に、カモが1羽、オスのウサギが4匹、チャボが1羽同居している。ウサギは砂場に設置されているU字管や木箱で遊ぶ。チャボのための木箱が高い位置に置かれており、安心できる場所となっている。エサは、コンクリート部分の真ん中に置かれ、順次食べに来る。掃除は、時々水を流す。



同居しているカモ



ウサギとチャボ

昨年度まで、ウサギは中庭に放し飼いにされていた。ウサギは穴を掘り、数も増えて、そのうち糞もたまると臭いもするようになり、管理が難しいとの結論に達して、中庭からウサギを撤退させた、といういきさつをもつ。その経験もあり、ウサギはこれ以上増やさないために、メスを2羽別室で飼育している。

また、3年生が総合的な学習の時間に、ウコッケイを飼育した。その際には、近くの獣医師を訪問し、ウコッケイの特徴や飼育の仕方を教わったと聞く。

加賀市立作見小学校 一ハムスターがいる学校一

屋外飼育舎には、オスのウサギ2匹とメスのチャボ1羽、玄関近くの廊下には、3匹のハムスターがいる。これらは飼育委員会（アニマル委員会と呼ぶ）の担当になっているが、他に4つの学級でウサギが飼われ、1つの学級でハムスターが飼われており、動物に関心のある教師が多く、児童と動物たちが比較的近い関係になっている。

屋外飼育舎は、水はけの悪い場所のため、床（コンクリート）



動物が大好きな飼育委員長

がじめじめすることも多く、すのこを敷いて動物たちが乾いたところに居られるようにしたが、掃除の負担が大きくなってしまった。改善の方向を探っているところである。



廊下のハムスター



教室のハムスター

小松市立稚松小学校 一玄関に最も近い飼育舎一

オス2匹、メス3匹のウサギを飼育している。オスはケンカをしないように個室に入っているが、金網で区切られていて、互いに顔を合わせることはできる。床はコンクリートで、各部屋に庭がついている。

飼育委員会の児童の多くは、希望して入り、平日はもとより休日も交代で世話をしており、掃除は行き届いている。

冬は周囲を塩ビ波板で囲むため、飼育小屋の中が見えずさびしい思いをするというので、飼育委員会では空き教室に3匹のメスを運び、長休みと昼休みにふれ合いタイムを設け



6年生ふれあいタイム

た。1学級ずつ実施するため、全部で16回行われた。

ふれ合いタイムでは、児童は長い間に腰掛け膝の上にバスタオルを敷く。飼育委員は、その上にウサギを乗せて、自然にウサギを抱けるようにするといった工夫が見られた。

稚松小学校の児童が、ウサギに親しみをもっている理由の一つに、飼育舎の場所が玄関に近いことが挙げられる。日常的に見ることのできる場所に飼育舎があることは児童にとって幸せである。ウサギもよく人に慣れている。



おだやかな表情のウサギ

白山市立美川小学校 一11匹のウサギ一

飼育舎の中に、病気のウサギが1匹、外で暮らす8匹のウサギがいる。この他、ケガをしたウサギが2匹、校務室で飼われており、合計11匹となる。

外で暮らす8匹のウサギは、鶏小屋の下に穴を掘りそこをねぐらにしている。この穴は、かなり大規模なもので、落盤のおそれがある。(図14)

ケガをした2匹のウサギというのは、他のオスとケンカをしたオス1匹と、その巻き添えをくって、噛みつかれたメス1匹である。

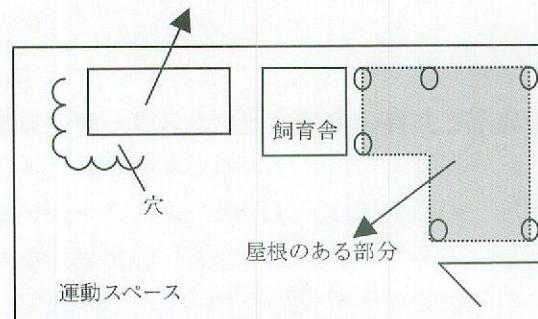
飼育委員会の児童も教師も、毎日の世話を精一杯



大規模な穴

図14 飼育舎の平面図

以前ウズラがいた床の高い鶏小屋



しているが、野性味の強いウサギの多頭飼育は、飼育の負担も大きいと思われる。

また、雄雌が混在していると、穴の中에서도数が増え、ケガをするウサギがこれからも出てくるおそれがある。そうなると、教育的な効果も得られなくなるので、すぐにも雌雄を離す等の対策をとるのが望ましい。

金沢市立野町小学校 一アヒルがいる学校一

ウサギが2匹、チャボが2羽、ウコッケイが3羽、そしてアヒルが2羽である。広い飼育舎にそれぞれ区切られた部屋をもち、床はすべてコンクリート。

飼育舎の入口には手を洗うための水道があり、足（長靴）も洗えるようになっている他、全部で6カ所の水道の蛇口がある。飼育担当の児童はマスク、ゴム手袋、長靴を着け、その仕事ぶりは、非常にてきぱきとしており、昼休みの短時間に掃除と餌やりを終える。



水道設備の整った飼育舎

池の水は毎日替え、アヒルのいる場所は毎日水流してデッキブラシでこすられる。

石川県獣医師会から発行された「ニワトリの世話の仕方」についての掲示物を小屋の前に貼り、また、糞を捨てる場所も決めている等、衛生管理に気を配っている。



掃除が終わるのを待つアヒル

金沢市立鞍月小学校 一ウサギを使った道徳の授業一

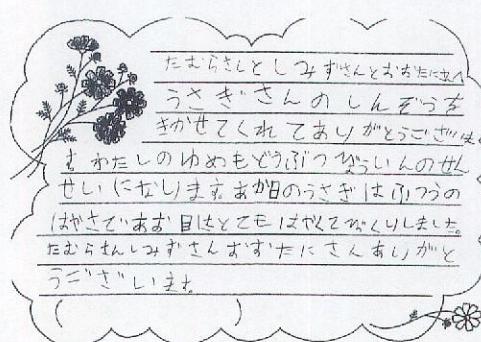
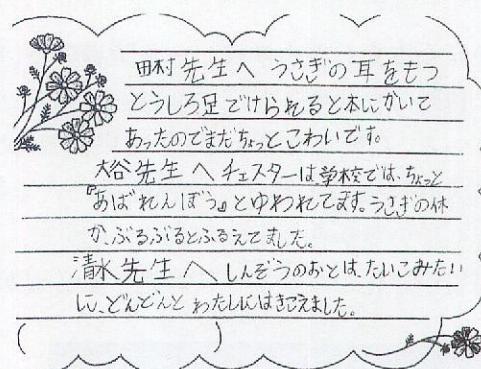
メスのウサギが2匹、玄関近くの飼育舎に飼われている。飼育舎には6畠ほどの運動場がある。

今年度、このウサギを活用して、第2学年の児童を対象に道徳の授業が実践された。価値項目は「3-(1)自然愛、動植物愛護」「3-(2)生命尊重」。

身近にいるウサギを観察したり、抱いたりすることにより、ウサギも人間と同じように生きていることを感じ、大切にしていくうという思いやりの気持ちと態度を育てることをねらいとして、3人の獣医師をゲストティーチャーとして招き、児童とウサギが気持ちよくふれあえる場面を設定した。

この授業においては、児童がウサギに直接触れ、ウサギのことを知り、親しみをもったことはもちろんだが、さらに高く評価できることは、動物の命を大切に扱う獣医師の姿を見て、命の大切さを感じたことである。その証拠に、その学級では3人の獣医師を「いのちの達人」と認定して、その後手紙を書いている。

この実践から、子どもが動物の命をどうとらえるかは、動物を扱う大人たちの行動にかかっていると言えるようである。



獣医師にあてた児童の手紙

金沢市立森本小学校 －4種類の動物がいる学校－

ウサギが2匹、ウコッケイが2羽、モルモットが1匹、セキセイインコが1羽と、4種類の動物を飼育している。

飼育舎の2室は同じ造りになっており、床はコンクリート、隅に幅50cm程の砂場がある。砂が浅く入っており、ウサギなどは頻繁に砂場に

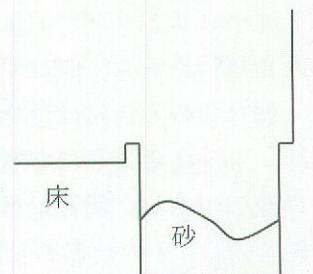


巣箱から顔をのぞかせるモルモット



玄関にいるセキセイインコ

図15 砂場の断面図



入って遊んでいる。砂場と床との段差がありすぎるようと思われたが、これは床に砂がこぼれないという利点もある。この深さであれば、砂場でウサギがどんなに思い切り砂を搔いても、床にまでこぼれることはない。

板を立てかけると、段差の問題も解決する。(図15)

その他、ウサギに野菜を与えるためのかごを、2枚重ねて、少しでも地面につかない工夫をしている。

動物たちの世話は、飼育委員会の児童になっているが、4種類の動物それぞれに1冊ずつ飼育日誌のファイルがあり、係の児童は毎日欠かさず記録している。

かほく市立七塚小学校 －希望者の多い飼育委員会－

13匹のウサギ、3羽のニワトリ・チャボが屋外飼育舎に飼われている。13匹ものウサギが、狭い飼育舎で共存していられるのは、出入り自由の6畳ほどの運動場に穴を掘り、それぞれの空間を作っているからと考えられる。しかし、これ以上ウサギが増えて、環境が悪化しないように対処する必要がある。



パンをちぎって食べさせる児童

穴についても、大規模なトンネルとなり、落盤事故のおそれがあるというので、定例の飼育委員会の時間には、穴埋め作業をしている。これも今後の課題である。

飼育舎のある庭には、大きな池があり、校長先生の作ったベンチに地域の人々が憩い、また家で採れたニンジンを児童にもたせてくれることもある。

飼育担当の教諭は、飼育方法や環境等のアドバイスを受けるため、押水の牧場公園に連絡をとったり、増えたウサギの引取先の学校に手紙を書く等の活動を行い、教育的な取り組みを展開している。1年前、ニワトリが怖くて触れなかつたが、飼育委員として活動しているうちに、動物とすっかり親しくなり今では抱くことも、手から餌を食べさせることもできるようになったという児童がいる。



定例となった穴埋め作業

内灘町立向栗崎小学校 一学校獣医師がサポートする飼育一

内灘町は、県内では金沢市とともに町の教育委員会が学校獣医師制度を設けており、学校に獣医師が校医として位置づけられている。病気や不妊手術等の費用を町が負担・補助するしくみがあり、本校はその協力体制がよくできている。



食事の時間

ニワトリ・チャボを全部で15羽、飼育している。ニワトリは、強いものから弱いものの順番が決まっているが、一番強いオスは家族を守るために体を張る。そんなニワトリの世界を見ることができる。



獣医師の指導を受ける児童

飼育舎は、中庭に建てられており、散歩する庭も有している。以前は、土の床で掃除もままならず不衛生になりがちであったが、校長が獣医師の勧めにより、防水コンクリートの床に作りかえた。そのため、水はけもよく、掃除も楽になり、飼育委員会の負担は一気に軽くなった。

獣医師は定期的に学校に訪れ、飼育委員会と交流をもつ。動物たちが何を望んでいるのか、飼育の心構えや動物の扱い方等の話をする。担当の教師との連携もよい。

本年度の6年生は、全員希望して飼育委員会に入ったというだけあり、動物と友好的な関係をつくっている。



飼育係に慣れているチャボ

富来町立福浦小学校 一低学年がお世話をするチャボたち一

3羽のチャボ・ウコッケイを飼育している。生活科との関連で、1・2年生が全員で飼育を担当している。低学年の時期に動物の世話をし、動物と仲良くなることは、教育的に考えていいへん好ましいことと思われる。毎日1年生と2年生の1人



チャボの体温を感じる児童

ずつのペアで、餌やりと水替えと掃除をしているが、2年生は、2年目なので、仕事の内容をよく知つており、1年生に教えながら仲良く働く姿が見られた。



今朝産んだ卵

1・2年生の児童はいやがらずに仕事をするが、一人では鶏をうまく抱くことができない。上手に鶏を抱かせたり、鶏と一緒に遊ぶことを教えてあげると、飼育がもっと楽しくなるかもしれない。写真は訪問した日の当番2人である。

志賀町立加茂小学校 一きめ細やかな飼育一

チャボとウコッケイを、16羽飼育している。一時は、43羽になったが、各地に引き取られ現在の数となる。暖かい季節には繁殖に制限はせず、孵ったヒナは大切に育てる。冬季はヒナにも母体にも負担が大きいことから、オスとメスを別にして、飼育舎の4室に分ける。

特徴的なのは、コンクリートである床の上に、砂を敷いており、汚れたら取り替えるという作業を繰り返していることである。砂は、運動場の砂場に毎年搬入される砂の一部を使用している。



取り替える土を乾かす作業



一斉にこちらを向くウコッケイ
(1羽チャボ)

リヤカー 2杯

分の砂を、乾燥させ、それを床に敷く。毎日掃除はするが、3週間から1ヶ月くらいで汚れてくると取り除かれ、新しい砂が敷かれる。取り除かれた砂は、学校園に入れる。野菜もよく育つ。「清潔な砂が鶏にとって一番の環境である」と、飼育担当4年目の教諭は経験をもとに言う。

先生はまた、児童にとって働きやすい環境作りに心を砕き、小さな熊手やほうき、ちりとり、サイズの異なる長靴等を、豊富に整備している。掃除の仕方、餌のやり方等、飼育委員の児童への要求もきびしいが、それが「命あるもの」に対する態度であることを、身をもって実践し、指導もしている。

教員や児童の働く姿を見て、保護者も休日に当番の児童と共に世話をしていたり、地域の農家やお店から野菜やくず米の提供があったりと、飼育動物を取り巻く人々の協力的な関係ができている。

輪島市立町野小学校 一掃除が大好きな飼育委員一

メスのチャボが3羽いる。床はコンクリートで、掃除は水を流してブラシでこする。飼育委員の児童は、よく働く。「今年一番楽しかったこと」というテーマで、飼育小屋の掃除をしているところを描いた4年生がいたと言う。



新しい飼育舎
(ふれあい用のサークルもある)



飼育されている3羽のチャボ

今年度、6年生が総合的な学習の時間に、地域の野鳥を1年間調査したこともあり、動物に対して興味をもっている児童も多い。休日は特に当番は決められていないが、担当の教員と、スポーツクラブで学校に来た児童が、世話をすることが多い。

授業では、今年度生活科の中でふれ合い活動、図工でチャボの写生をした。

珠洲市立上戸小学校 一子ウサギとともに学校中が成長したー

我々が訪問したとき、オス1匹、メス1匹、子ウサギ3匹の計5匹のウサギが飼われていた。床はコンクリートに藁が敷いてある。掃除は、糞を取り除き、雑巾で拭くという丁寧なものである。飼育委員は熱心であり、休日も登校する。

1学期にメスのウサギを手に入れ、夏休みには、高床式の小屋が教頭の手によって作られた。

7月の末、飼育担当の新傳教諭がオスのウサギをもらい受け、2匹にしたところ、次々とウサギの子が生まれるが、育て方がわからず死なせてしまったことから、児童も教師も、インターネットで飼育法を調べたり、七尾市の獣医師を招いたりして、学校をあげての取り組みとなった。飼育委員会の児童が交代で1日6回の授乳を行い、休日は家に持ち帰るなど、心血を注いで世話をしたが、これも失敗に終わった。3度目の出産に際



餌をねだるウサギ

して、2度の苦い経験から、敷いてあった砂を取り除き、寒くないように藁を敷き詰めたところ、5匹の子ウサギが育ち、児童は命を育てることの難しさと喜びを実感したことと思われる。

この子育て奮闘の様子を、ビデオカメラに収め、プレゼンテーションを作成し、全校集会で紹介した活動も価値のあるものである。

これ以上増えないように、現在はオスを高床式の小屋に残し、メスと子ウサギは別の中屋に分けてある。



子ウサギと飼育委員

訪問を終えて

今回訪問した学校では、それぞれの与えられた環境で、精一杯努力している飼育担当教師の姿が見られ、児童も楽しんで飼育をしている様子がうかがえた。

本来動物が好きで、飼育委員会に入ってきた児童が、掃除の負担の大きさにだんだんつらくなってくるという話も耳にする。あまりに大規模な飼育を行っていると、動物との関係も浅くなる。動物たちを持て余すような飼育の現状が見られる場合はこれを見直し、負担は少しで、動物とふれ合える時間を多くする工夫をしていくことが必要であろう。

動物と児童が共生し、学び合える環境にしていくために、我々教師ができるることは、次のことである。

- ・掃除が簡単に、しかもきれいになる工夫をする。
- ・動物を分けて飼う。
- ・児童の近くに置いて飼う。
- ・児童の手に負える動物を飼う。

これらのことにより、動物飼育による教育効果が一層高まると思われる。



大きいニワトリが抱けるように
なった児童

あとがき

犬を連れて散歩に出たときと、そうでないときとでは、人から話しかけられる回数に大きな違いが見られたという調査がある。この場合、犬は人ととのコミュニケーションを促進する役割を果たしている。動物が子どもたちのそばにいるということは、動物との関係のみならず、子どもたち同士や動物を取り巻く人々との関係がつくられていくというよさを含んでいる。物言わぬ動物だからこそ、人の心を開かせる。

教育に携わる我々は、子どもたちと動物が一緒にいる風景を、もっと大切にしていきたいものである。

謝辞

本稿を作成するに当たり、西岡登氏（石川県立金沢泉丘高等学校教諭）には、アンケート作成に関わっていただきました。田村兼人氏（石川県獣医師会委員長、たむら動物病院院長）には、いくつかの飼育動物訪問に来ていただき、飼育に関する助言もしていただきました。厚く御礼申し上げます。

また、アンケートにご協力いただいた県内各小学校、飼育動物訪問で対応された先生方にも、深く感謝申し上げます。

参考文献等

- 鳩貝太郎・中川美穂子編（2003）学校飼育動物と生命尊重の指導 教育開発研究所
文部省（1998）望ましい動物飼育のあり方
群馬県獣医師会学校動物愛護指導委員会（2003）ふれあい—指導案一
埼玉県立北教育センター（1998）動物飼育Q & A
中川美穂子（2000）学校飼育動物のすべて 株式会社ファームプレス
国立教育政策研究所 研究代表者鳩貝太郎（2003）学校教育における飼育動物 平成13年度～15年度科学研究費補助金（基盤研究C）中間報告書（資料編）
国立教育政策研究所 研究代表者鳩貝太郎（2004）学校教育における飼育動物 平成13年度～15年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書
全国学校飼育動物研究会（2004）動物飼育と教育第1号
小菅正夫（2005）命を伝える 教育研究 No.1237. p.41
沢口俊之（2005）「人間らしい脳」を育むには？ 教育研究 No.1237. pp.22-23
アン・マクブライド、斎藤慎一郎訳（1998）ウサギの不思議な生活 晶文社
大野瑞絵（2004）ザ・ウサギ 誠文堂新光社
大竹隆之、桜井富士朗監修（1996）くわしいウサギの衣・食・住 どうぶつ出版
霍野晋吉監修、ウサギぞっこん俱楽部著（2000）ウサギの気持ちが100%わかる本 青春出版社
菱村幸彦編（2002）「平成13年改善指導要録」の基本的な考え方 ぎょうせい
学校飼育動物を考えるページ <http://www.vets.ne.jp/~school/pets/>
学校飼育動物研究会 <http://www.vets.nc.jp/~school/pets/siikukennkyuuai.html>
山口県ホームページ <http://www.pref.yamaguchi.jp/gyosei/nosei/koubyou11.htm>

抄録カード

石川の自然 第29集 生物編(14)

県内の学校飼育動物の現状を調査し、その教育的意義を明らかにするとともに、飼育上の課題を解決し、教育的効果を上げるための方向を示す。

学校にくらす動物たち —学校飼育動物の教育的意義—

石川県教育センター 中村雅恵
竹田 勉

- I はじめに
- II アンケート調査の概要
- III 学校における動物飼育のあり方
- IV 学校飼育動物の教育への活用
- V 県内小学校の飼育動物訪問

石川県教育センター紀要 第73号

平成17年（2005）3月31日発行

発行所 石川県教育センター

〒921-8153 石川県金沢市高尾町ウ31番地1

TEL 076-298-3515

FAX 076-298-3518

代表者 浅田 秀雄

印刷 株式会社 山越

